

飛鳥・白鳳小金銅仏の発願者、制作者 上

久野 健

はじめに

七、八世紀の仏像中には、三十裡内外の小金銅仏の遺品が多数ある。東京国立博物館の四十八体仏をはじめ、広く日本各地に分布している。

こうした小金銅仏の大部分は寺に伝来したものか、或は、古代寺院趾等から出土したものであるが、これらの像は、寺の仏堂に安置し礼拝の対象とするには小さ過ぎる感がある。それでは一体これらの小金銅仏は本来いかなる理由で発願造立され、どこに安置したものであろうか。私は、これらの事情を小金銅仏のいくつかに記されている銘文及び現在仏体は無くなっているが、銘を刻んだ光背のみが残っているものさらに記録により銘文のみ残っているものや当時の文献等から考えてみたい。また、こうした小金銅仏は、いかなる場合に発願されたものか、いいかえれば、造仏理由と発願者の関係、及びその制作者について述べてみたい。

一

七・八世紀の小金銅仏の造像記及び記録等を通観し、その発願の動機

や理由を整理してみると、ほぼ三種類に分類することができる。すなわち、その一つは、現世父母や一家親族の安穩を祈って発願したもの、その二は、夫や妻ないしは近親者が死んだ際その冥福を祈って発願造立したもの、その三は、天皇や四恩の為に祈願をこめて造る場合等がそれである。現在の遺品や文献からみるとこのうち、一の父母や親族のために造る場合が五例みられ、死者のため造像した例も五例ある。また三の天皇のためというのは、三例をあげることができる。

そこで次に銘文等によって知られる発願の理由を具体的に述べてみよう。一の父母親族のための造像としては、孝徳天皇白雉五年（六五四）の制作と推定される四十八体仏中の甲寅年銘の光背^{（挿図）}が現在の遺品中では最も早い例である。これには「甲寅年三月二十六日に弟子王延孫が、現存する父母の為に、金銅釈迦如来像一軀を敬造し、父母がこの功德により現世の安穩をうる事ができると同時に来世に三途の河を経ることなく、また八難を避けて速に浄土に生れ、仏にまみえ法を聞かんことを祈願して本像を造った^{註一}」由が記されている。

周知のようにこの釈迦如来像は、今日失われ、光背のみ残っており、

挿図 1 甲寅銘光背 東京国立博物館蔵

その制作年代も白雉五年とする説とこれを六十一年遡る推古二年とする説^{註二}があるが銘文中には、

この功德により速に浄土に生れることを祈願しており、かかる浄土教の思想が推古朝の初年にすでにあつ

挿図 2 同背面

たとは考え難く、^{註三}まず白雉五年の甲寅の

年の制作と考える方が穏当であろう。

次は、河内国古市郡の西琳寺宝蔵に安置されていたという坐高一尺六寸の金銅阿弥陀如来像の光背銘文である。西琳寺は、丈六の阿弥陀如来像を本尊とする飛鳥時代創建の西文氏の氏寺であるが、この寺の創建事情は、文永八年に比丘惣持が記した「河内国西琳寺縁起」に詳細に記さ

れている。この縁起は、かなり信すべき資料として早く、「続群書類従」

や「大日本仏教全書」に収録され、さらに、昭和十三年七月発行の「美術研究」七十九号には、荻野三七彦氏の「河内国西琳寺縁起に就て」と

題する書誌学的研究が発表されている。この縁起の中に、同寺宝蔵に安

置する一尺六寸の金銅阿弥陀如来坐像の銘文が載せられており、当時の

小金銅仏の発願の事情を知る一資料となっている。この銘は、初めに仏

教の功德を記し、次に、「書大阿斯高君の子、書支弥高が、仏法を修行

し、西琳寺を創めた。またその子の梅檀高、土師連長兄高、書羊古、書

首韓会古の四人が堂塔を建立した。宝元五年己未正月に二種類の知識が

協力して、阿弥陀如来及び二菩薩像を発願造立し、この功德により、現

在親族が万世に福を延べ、七世父母が福力を得んことを願う」という意

味の銘が記されている。この銘文中の宝元五年己未正月については、井

上光貞氏により、斉明天皇五年の己未年と推定され、斉明天皇宝元五年

歳次己未五月の略であろうと述べられている。^{註五}西文氏は、河内に本拠を

おく渡来系の有力氏族で、この書氏が近隣の土師氏と協力し、この寺の

堂塔を造営し、また現在親族の繁栄と七世父母の福德を祈願して阿弥陀

三尊像を制作したことがこの銘文から知られる。この西琳寺の坐高一尺

六寸の金銅阿弥陀如来像は、無論今日伝わっていない。

次は、壬辰年の銘をもつ島根県出雲鰐淵寺の観音菩薩像^{図版六・七}

である。本像は、像高七九・八厘の金銅像で、台座の六角形の框上縁部

に刻銘があり、本像の由緒が述べられている。すなわち、

「壬辰年五月、出雲国若倭部臣徳太里が、父母のために菩薩像を作り奉る」^{註六}

のであろう。

法隆寺に造像記の銅板のみ残る「甲午年銘観世音菩薩造像記銅板」^(挿図六・七)もまたこの一例である。この銅板は、良訓が録した「法隆寺記補忘集」(享保十九年)の時代にすでに本体と離れてしまっていたか、本体が失われたかして造像記銅板のみになってしまっていたもので、本来像の何処に附いていたものかも分らないが、小金銅仏に付属していたことは、まず、文意からして間違いないものと考えられる。この銅板には、

「甲午年三月十八日、鵜大寺(法隆寺)の徳聡法師、片岡王寺の令弁法師、飛鳥寺の弁聡法師の三僧が父母報恩のために観世音菩薩像を敬造す。この小善根により无生の法忍を得しめ、六道の四生の衆生ともに正覺を成ぜんことを」^{註七}

という意味の銘が記されている。この甲午年については、平子鐸嶺^{註八}山田孝雄^{註九} 法隆寺大鏡解説等すべて、持統天皇八年と推定する点では一致し、異論をみない。

さて、これら父母ないしは、親族の福德を祈願して造像された小金銅像は、造りおわってからどこに安置したものであろうか。これら五例の

挿図 3 観音菩薩像
島根 鰐淵寺蔵

挿図 4 同側面

挿図 5 同 台 座

という説は、「造像銘記」以来あまり異論がない。また出雲国の若倭部については、「出雲風土記」の出雲郡の条に、郡司主帳无位若倭部臣の名がみえ、「正倉院文書」の天平十一年出雲国大税賑給歴名帳にも若倭部臣の名を見ることが出来る。こうした資料から考え、若倭部臣徳太里は、出雲の国に土着する有力氏族の出身であろうことが推定される。かれが持統天皇の六年五月に父母の福德を願ってこの観音菩薩像を発願造立したも

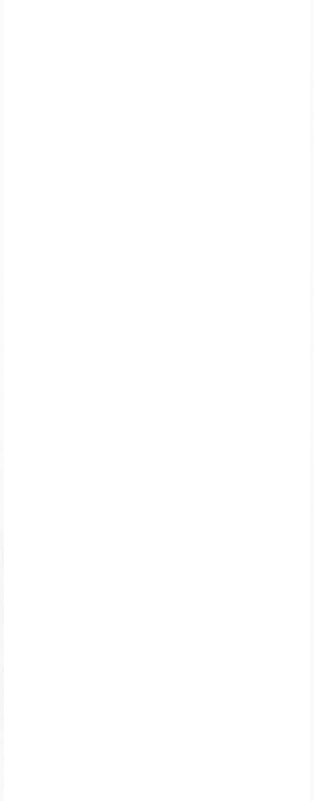
挿図 6 銅板造像
記 表 奈良
法隆寺蔵

挿図 7 同 裏

うち安置場所がほぼ推定できるのは、西琳寺の阿弥陀三尊像だけである。同阿弥陀三尊像の銘文中には、西文氏の氏寺である西琳寺の創建のことから堂塔を建立したことまで記されており、またこの像は同寺の宝蔵に安置されていたものであるから、まず制作後に西琳寺に安置されたことは間違いないであろう。また、五例の発願者をみるといずれも有力氏族か僧であることは、父母の安穩や一族の繁栄を願って造られた小仏像は、多くはその氏族により建立された氏寺か、僧の所属する寺院に安



挿図 8 戊子年銘釈迦及脇侍菩薩像 奈良 法隆寺蔵



挿図 9 同光背銘文

置されたものではないかと考えられる。

二

挿図10 同 線写真

夫や妻ないし近親者の死後、その冥福を祈って小金銅仏を発願造立する例も、

飛鳥・白鳳時代には多かつたようである。その最も古い例は、法隆寺大宝蔵殿の戊子年銘釈迦及び脇侍菩薩像(挿図11)である。本像は飛鳥時代の基準的作例として著名な遺品であるが、銘文は難解な

挿図11 同釈迦如来像側面 線写真

挿図12 同脇侍像 線写真

個所があり、諸説がある。しかし、この銘について最も詳しく述べているのは山田孝雄・香取秀真編の「続古京遺文」で、いまそれに従えば、

「戊子年十二月十五日、朝風文が、その親族中の年長者である済師の智慧の燈燭を得て、蘇我大臣のために誓願して、この釈迦如来像を敬造す。此の願力をもつて七世の四恩、六道の四生ともに正覚を成ぜんことを」^{註一〇}

という意味であろう。戊子の年は、推古天皇三十六年に当り、此年は蘇我馬子薨後の三年に当っており、この三年忌のための造像かと述べられている。もっとも、馬子の歿年は、「日本書紀」では推古天皇即位三十四年丙戌五月とし、「法王帝説」では、同年八月にはまだ生きており、同書の引く「又本」によれば翌三十五年夏六月辛丑薨としている。「日本書紀」の説をとるとしても、その薨日は夏五月戊子朔丁未即ち二十日であり、銘文中には十二月十五日とあるから三年忌の発願とするには無理がある。また桃裕行氏の研究によれば、飛鳥時代には、三年忌という年回仏事は行われなかったという。さらに福山敏男氏は、この戊子年銘の字体が前記の「甲午年銘観世音菩薩造像記」の字体と酷似している点

から干支一運を下げた持統二年の戊子の年としているが、^{註一一}本像の様式は、ここまで下るものではないであろう。このように異説は多いが、この釈迦及び脇侍菩薩像が蘇我大臣の追福のために制作された仏像である

挿図13 辛亥年銘観音像
東京国立博物館蔵

挿図16 同r線写真

挿図15 同背面

挿図14 同側面

点では諸家の説は一致している。

四十八体仏中の辛亥年銘観音像(挿図十三)もその解説について異説の多い像であるが、大意は、ほぼ次の通りである。

「辛亥年七月十日記す、笠評君名は大古臣、辛丑の日に崩去す。児にあたる布奈太利古臣と伯父である建古臣の二人が、誓願してこの像を敬造した」^{註二二}

という意味で、文中、辛亥の年を崇峻天皇四年の辛亥の年とする説と孝徳天皇の白雉二年の辛亥の年とする両説があり、今日も定説がない。しかし私は、本像の様式が飛鳥前期の仏像に比べやわらかい点や、鉄心を胎内に残した造像法及び次に述べるような理由から後説をとっている。すなわち、文中にある評は郡と同義で、笠評君というのは、吉備の笠評

の君と考えられ、こうした行政区分が、崇峻四年という古い時代にあったとは考え難いからである。

観心寺の阿弥陀如来像の光背(挿図十七)は、金銅観音菩薩像と共に、同寺に伝わったものであるが、この光背の銘文中には、阿弥陀仏像と明記しており、果してこの観音像に本来附属していた光背か、あるいは観音像はこの阿弥陀如来像の脇侍であったものか、または全く関係ないものか、不明である上に、根津美術館にも同形・同文の光背(挿図十九)があり、どちらがオリジナルかという問題もまだ解決していない。しかし、この観音像(挿図二二)の様式は、まさしく、白鳳前期の特色をもっており、ほぼ近い頃の制作と推定される。さて、この銘文には、次のような願文が記されている。

「戊午年十二月に治伊之沙古が亡くなったためその妻である汗麻尾古が弥陀仏像を敬造した。願くは、この功德により、亡くなった夫及び七世の父母がことごとく浄土に生れんことを」^{註二三}

という意味である。文中の戊午年は、斉明天皇四年と

挿図19 光背 根津美術館蔵

挿図17 阿弥陀如来像光背 大阪 観心寺蔵

挿図20 同 銘 文

挿図18 同 銘 文

推定され、異説はあまりない。

次は、四十八体仏中の丙寅年銘の半跏思惟像(挿図二五)である。この像の台座下框に刻まれた丙寅年についても、これを推古天皇十四年の丙寅の年とする説と天智天皇五年の丙寅とする両説があり、いまだに結着を

挿図24 同背面

挿図23 同側面

挿図22 同斜側面

挿図21 観音菩薩像
大阪 観心寺蔵

阿麻古の為に願いて、南无頂礼して作り奏^{注一四}つる」。

文中の高屋大夫については、関晃氏に注目すべき研究がある。

挿図27 同背面

挿図26 同側面

挿図25 菩薩半跏思惟像
東京国立博物館蔵

みないが、私は、本像の三面宝冠を頂いた形式や発達した鑄技及び銘文中に「大夫」の文字がみられる点等から後説をとっている。この銘文自体も判読に諸説があるが、大意は次の通りである。

「歳は丙寅^{ほし}に次る年正^{やど}月生十八^{つきたちで}日に記す。
高屋大夫^{わか}分に韓婦^{わかん}夫人、名は

すなわち関氏はこの丙寅年銘半跏思惟像について、推古十四年説と天智天皇五年説のあるのを紹介し、

「大夫の語の天智朝以前の使用例が後世の文献以外には全く見えないことから考えると推古朝というのはやや早すぎる感もあり、また高屋連という氏は「新撰姓氏録」の河内国神別の条に饒速日命の子孫で、石上氏と同祖とあり、続日本紀慶雲元年（七〇四）六月乙丑の条に「河内国古市郡人高屋連葉女、一座三男、賜純二疋・綿二屯・布四端」という記事があるだけで、それほど有力な豪族だったとも思われず、次に述べる「大夫」と呼ばれるものの層がやや下のほうに拡がった時期のものではないかと思われるので、どちらかといえば、やはり後説のほうが当たっている可能性が大きいというべきであろう」^{註一五}

と述べ、天智五年説を支持している。

銘文中の「大夫」は「マエツキミ」と読み、また藪田嘉一郎氏は韓婦夫人を韓邦夫人と判読している。^{註一六}なお本像の尊名もまだ定説がなく、あるいは、後述する野中寺蔵の半跏思惟像の銘に「弥勒御像」と明記するところから、同じ姿のこの像も弥勒かとする説や、如意輪観音又は悉多太子像かとする説などがある。^{註一七}

もう一例は、近年私が「美術研究」二九八号に紹介した大分・長谷寺に伝わる金銅観音菩薩立像である。本像も台座の下框に横並びに造像銘が陰刻されている。この銘は

「壬の歳は撰提格に次る林鐘十五日、周防凡直百背の女汝背児が逝去したため誓願に依って観世音菩薩像を作り奉る」^{註一八}

という意味のことが記されている。撰提とは星の名で、撰提格とは太歳星が寅の方位にあるをいい、転じて寅の歳を呼ぶ。また林鐘は、音律の名で六月をあらわす。すなわち壬寅年六月十五日という意で、壬寅年

は、本像の片足を一歩踏みだした姿勢や瓔珞を別鑄にして像につけるような技法、さらにその面相等から文武天皇大宝二年（七〇二）の壬寅の年と推定される。周防凡直は、太田亮氏の「姓氏家系大辞典」によれば「凡河内氏の族にして、周防凡造家の氏姓なり、氏人は、宝龜十年六月紀に「周防国周防郡人外従五位上周防凡直葦原の賤男公、自ら他戸皇子と称して百姓を斑惑す」とあり、また「東宝記」第八、天曆八年五月十五日の太政官符に「周防国玖珂郡伊宝郷戸主周防凡直宝則」等が見え、周防国の大豪族の家系であることが知られる。その一族の中の一人、百背の女がなくなったので、その冥福を祈り造立されたのがこの観音菩薩像であることは明かである。

以上五例の造像銘から、七、八世紀に於ては、夫や妻や娘等の近親者の死をいたんで、小金銅仏像が発願造立されることが多かったことが分る。その発願者は、先の父母の安穩のために小金銅仏を発願した人々と同様、有力な氏族に属するものが多い点も共通している。死者のために造立された小金銅仏は、制作後どこに安置したかは明記したものがないが、恐らく、発願者の氏寺かゆかりの深い寺に安置したものではないだろうか。

三

小金銅仏中、天皇のために祈願造像した金銅仏は三例がみられることは前に述べたが、その一つは、大正七年、河内・野中寺の宝蔵内の塵芥中から、岩井武俊・田沢金吾・中幸男三氏により発見された金銅弥勒菩薩像（挿図二八）である。この像の台座円形框には、二字ずつを一行として

挿図28 弥勒菩薩像 大阪 野中寺藏

挿図30 同 側面

横並びに造像記が刻まれている。この銘文も異説が多いが、いまほぼ妥当と考えられる諸説に従って大意を記すと、

「丙寅年四月、大旧八日癸卯開に記す。栢寺の智識等が中宮天皇の御悩平癒を祈り、誓願して弥勒御像を作り奉る。友等の人数は百十八人で、これにより六道四生の人等が仏法の教えをうけんことを」^{註一九}

という風に解説される。銘文中「開」とは、暦の用語で、これに当る日は舎宅を造ったり、病を治すのによい日とされる。栢寺については、

挿図29 同 r線写真

「造像銘記」は栢寺と読み、田中重久氏は栢寺又は檀寺とし、福山敏男氏は栢寺とする。^{註二二}

また中宮天皇は間人皇女、あるいは^{註二三}

挿図31 同側面 r線写真

齐明天皇と推定し、丙寅年は、天智五年（六六六）とする点では諸家一致しているようである。即ち、本像は天智天皇五年に栢寺（栢寺あるいは

橘寺）の智識等百十八人が、間人皇女あるいは齐明天皇の御病氣平癒を祈って発願造立した弥勒像であるという意味である。

間人皇女は、舒明天皇と皇后宝皇女の間に生れた嫡女であり、孝德天皇の皇后であった。齐明天皇は齐明七年（六六二）七月二十四日に筑紫の行宮で崩じており、間人大后は天智四年二月二十五日になくなっていく。中宮天皇を齐明天皇とすると、野中寺弥勒像の発願はあまりに時間的にへだたりすぎるのに対し、間人大后とすれば、発願から一年にしてこの像が出来たことになり、無理がないようである。

挿図32 千仏多宝仏塔銅板 奈良 長谷寺蔵

塔を敬く造り奉るとある。次に釈迦多宝の竝坐するこの多宝塔の図相を述べ、聖帝の徳をたたえ、この宝塔を豊山に安置することにより多くの修行者がこの山に錫を負って来り遊ぶであろうことを讃美し、最後に「歳は降婁に次る漆兎の上旬、道明捌拾許人を率引して、飛鳥の清御原の大宮に天が下治す天皇の為に敬く造り奉る」と結んでいる。降婁は戊年、漆兎は七月をさす。飛鳥清御原大宮治天下天皇は天武天皇か持統天皇をいう。そこで古くは、戊年を天武天皇の朱鳥元年甲戌に当ると推定されてきたが、飛鳥清御原天皇というような宮名による「おくりな」が天皇存命中行われる例は殆どないため、あるいは文武天皇即位二年の戊戌とする説や養老六年の壬戌とする説などがあり、また福山敏男氏は、別の観点からこの銅板銘を著しくさげられた。^{註四}すなわち「三代実録」貞観十八年五月廿八日の条に見える長朗の牒に

「大和国長谷山寺は、是れ長朗が先祖、川原寺修行法師位道明、宝亀年中其の同類を率い、国家の為に建立する所なり」

とあるのに注目し、降婁は、宝亀年中の戊年即ち宝亀元年庚戌であろうと主張された。千仏多宝仏塔銅板には、最後にこれを、「天武天皇（或は持統天皇）のために敬く造り奉る」と明記しており、天平時代の末になってから数代前の天皇のために発願造立するという点、宝亀元年説には直ちには賛同しがたい。また近年、鶴岡静夫氏も、福山説を批判し、銅板に鑄出している建物等の年代を繰合すれば、天武朝頃に造られたとするのが妥当であろうと述べている。^{註五}この問題はさておき、この銅板が、天皇のために造立されたことは間違いない。

天皇のために造立されたもう一つの例は、長谷寺に伝る千仏多宝仏塔銅板^三であるが、これは、いままで述べた小金銅仏とは、その大きさや形も違うけれども、参考までに、ここでふれておこう。この銅板は、中央に釈迦多宝の現出した仏塔を配し、それを多くの仏菩薩が圍繞し、上方には千体仏を押し出し、下方には、左右隅に仁王をあらわし、その中央に本銅板の由来を記した造像記を陰刻している。この銘は、初めの数行の下の部分で、欠失している上に、本像の制作年代については異説が多く、今日も定説がない。この造像記はきわめて長文なのでその主要部分の大意のみ記すことにする。この文章は、初めに長谷の霊峯に塔を造り舍利を安置する功德を述べ、天皇陛下の為に千仏多宝仏

も、「豊山鷲峯」という句があり、また「秘瑞巖」という句などから長谷山上の靈窟に安置されたいことが推定されるが、「諸寺縁起集」の長谷寺の条に引く、本尊十一面観音像の前の壁上にあった障子縁起には、此の銅板が長谷寺の西岡の石窟にあったと記している。こうしたことから、天皇のために発願造立された金銅像は、制作後野中寺弥勒像にしても、栢寺（栢寺或は橋寺）に安置され、長谷寺千仏多宝仏塔銅板も長谷寺の石窟に安置され、それを発願した知識人たちにより礼拝されていたらしいことがほぼ推定できる。

さらにもう一例は、文献により知られる造像で、果して小金銅仏かどうかさえ不明であるが、従来あまり注意されていない、唐人郭務悰等が天智天皇の冥福を祈って発願造像した阿弥陀如来像についてふれておこう。「善隣国宝記」によれば、唐使郭務悰等三十人と百済の佐平禰軍等百余人は、天智天皇三年十月頃に筑紫に到着したが、かれらは「天子の書」をもっていないとし、正式の使者とは認められず、太宰府にとめおかれ、京に上ることは許されなかった。書紀天武天皇元年三月には、阿曇連稻敷を筑紫につかわして、天智天皇の喪を郭務悰等に告げしめたところがある。郭務悰等は、その報せに驚き、喪服をきて東に向っておがみ書函と信物をたてまつった。その後この唐人らは天智天皇のみにために阿弥陀如来像一軀を作ったという。このことは書紀持統天皇六年五月の条に、

「筑紫大宰率河内王等に詔して曰く、大唐の大使郭務悰が、御近江大津宮天皇の為にに造れる阿弥陀如来像を上送れ」

と記されていることから分る。この像は材質、法量ともに不明であるが、郭務悰らにとっては、旅行先での造仏であり、当時の多くの例から

すれば、小金銅仏の可能性が多いであろう。この像も、藤原京にはこぼれた後、どこに安置されたかは不明であるが、あるいは天智天皇とゆかりの深い崇福寺にでも寄進されたものではないかと想像する。

この他、小金銅仏の中には、当然、誕生仏や摩耶夫人像なども含まれるが、これらは推古十四年から始まったという仏生会の像として制作され四月八日の釈尊の誕生日に灌仏等の法会のためのものであることは云うまでもないことであろう。

四

七、八世紀の小金銅像の銘や文献等を通観してみると、父母・親族の福德を願って発願造立した小仏像も、夫や妻や娘の死を悼んで造立したものも、あるいは、天皇のために発願し制作された像も、多くは制作後、発願者の氏寺なり、ゆかりの深い寺等に安置されたいことが推定された。しばしば小金銅仏は寺の安置仏としては小さすぎるところから、個人の自宅に安置し、朝夕礼拝する念持仏が多かったのではないかと考えられてきたが、少くとも、在銘像や当時の信すべき文献等から知られるところは、必ずしもそうではないことが知られる。

しかし、一方、六世紀前半に渡来した司馬達等が、大和坂田原に草堂を建て仏像を安置したとする「扶桑略記」の記事や、敏達朝に百済より帰朝した鹿深臣が弥勒石像一軀を請来し、蘇我馬子がこれを得て石川宅に仏殿を営み安置したとする「日本書紀」や「元興寺縁起」の記事等は、一部に、私宅に仏像を安置し礼拝する風が早くからあったらしいことを暗示している。しかし、それらも、ごく一時的なことでは、やがて

は、氏寺等を建立し、仏像もそこに移安したらしいことを考えると、少くとも、天武朝頃までは、小金銅仏を私宅に安置するという風は、きわめて少なかったのではないかと考えられる。

しかし、天武朝の末年になると、この事情は一変する。それは、篤く仏法を信奉した天武天皇により、次のような詔が出されたことによる。

すなわち、書紀天武十四年三月壬申の条には、

「詔したまはく『諸国に、家毎に仏舎を作りて乃ち、仏像及び経を置き、て、礼拝供養せよ』とのたまふ」

とある。この詔に関し、石部清直の「大神宮寺排斥考」には、諸国每家というのは国府をいい、その国府に仏舎を作り仏像と經典を安置せよという意でこれが国分寺の起源であると主張し、今日もこれに従う学者もいるが、家毎とは、まさしく、公卿の私宅に仏殿を作れという意味にとる者も多い。これは、「日本書紀」の持統朝の記事を合せ考えるならば、まさしく、後説が当を得ていよう。すなわち、持統天皇五年二月壬寅の条に、

「天皇・公卿等に詔して曰はく『卿等、天皇（天武）の世に仏殿、経蔵を作りて、月ごとの六齋を行へり、天皇、時時に大舎人を遣して問訊ひたまふ。朕が世にも之の如くせむ。故、当に勤しき心をもて、仏法を奉るべし」

と詔しているところを見れば、天武天皇の十四年以後は、実際に公卿等の私宅には、仏舎を造り、仏像や經典が安置され、月の八日、十四、十五日、廿三日、廿九日、三十日の六齋日には、鬼神が人を悩害する日とされ、殺生をつつしんでいたに違いない。しかし、この仏舎とは、氏寺というような大規模なものではなく、私宅に仏殿を設けるのであるから

その大きさも自ら制限され、安置の仏像も、今日多数の遺品がみられる三十糎内外の小仏像であった可能性が強い。この小仏像は、今日の遺品から推定すれば、小金銅仏が最も多く、その他、押出仏や埴仏や木像も混じっていたであろう。また尊名としては、釈迦、薬師、弥勒、阿彌陀、観音、勢至菩薩、それに悉多太子像もあつたかも知れない。

この私宅に仏舎を造り仏像、經典を安置する風は、天武朝頃から天平時代前期頃までで、天平時代後期にはいると、それほど行われなくなつたらしい。このことは、丁度私宅の仏舎に安置するのにふさわしい金銅仏や押出仏は、藤原京時代頃から天平前期頃の様式をもつものが多く、天平時代後期の制作に属するものは、きわめて少ないからである。もっともこのことは、天平時代には主要な公卿の家々には、前代に作つた仏像が伝わっており、新造の必要がなかったためとも考えられる。それにしても、かかる小金銅仏を多数伝えていた寺院が、飛鳥・白鳳時代創建の法隆寺や橘寺、あるいは大安寺等に多く、天平時代に造営された東大寺や西大寺等にはきわめて少ない点は、暗示的である。また天平時代には、父母や死者のためあるいは天皇のために小金銅仏を造つたと記するような銘像が一体も残っていないことは、明かに飛鳥・白鳳時代と天平時代との信仰や造仏の変化を示している。

天平十九年の「法隆寺資財帳」をみると、当時の法隆寺には、用明天皇のために造立された薬師如来像、聖德太子の冥福を祈って制作された釈迦三尊像等の大像の他、金埴銅像八具、金埴押出銅像三具、宮殿像二具、金埴灌仏像一具、金埴雜仏像五軀等があり、これらは、人々が寄進

したものであると記している。さらにそれより三百数十年を経た承暦二年（一〇七八）の「金堂日記」によると、当時法隆寺の金堂には、西の壇に小仏十八軀、東厨子には金銅小仏三尊、西厨子には阿弥陀三尊、大厨子には上段に小仏四十六軀、また下段には、橘寺の小仏四十四体が安置してあったと記している。これらは、木像を除いた小金銅仏の数で、十一世紀の法隆寺の金堂には夥しい数の金銅仏が安置されていたことが分る。このことは何を物語るのであろうか。

飛鳥時代以来、父母や親族の福德を願って造立された小金銅仏や夫妻や肉親の死を悲しんで造られた小金銅仏、あるいは天皇のために発願された仏像等が、多くそれを発願した人の氏寺なりゆかりの寺に安置されたことは繰返し述べたが、天武朝以後は、さらに公卿等の私宅にも小金銅仏像が安置されるようになり、これらの小金銅仏も、その家の没落等により、氏寺なりゆかりの寺等に寄進されることも多かったであろう。こうした風は、飛鳥白鳳時代に多かったため、当時の都のあった飛鳥地方ないしはその近くの寺々を集る結果になったのではないだろうか。しかし、飛鳥地方の寺々は、都が藤原京から平城京へ、やがて平城京から平安京へと移るに従って衰微し次ぎつぎに廃寺となり、それらの寺に伝った小金銅仏等は、わずかに聖徳太子に対する信仰により法燈をかかげてきた橘寺に移安され、さらに白鳳以来火災にあわず、伽藍諸堂の完備していた法隆寺へと移されていったものではないだろうかとは私に考えている。

註

1 東京国立博物館の釈迦如来像光背銘の原文は次の通りである。

甲寅年三月廿六日弟子
王延孫奉為現在父母
敬造金銅釈迦像一軀
願父母乘此功德現
身安隱生生世世不經
三塗遠離八難速生
淨土見仏聞法

2 甲寅年を「造像銘記」は孝徳天皇の白雉五年とし、小林剛「御物金銅仏」昭和二十二年東京国立博物館刊
水野清一「飛鳥白鳳仏の系譜」（仏教藝術四号）昭和二十四年三月
熊谷宣夫「甲寅銘王延孫造光背考」（美術研究二〇九号）昭和三十三年等
等は推古二年の造像としている。

3 井上光貞「日本浄土教成立史の研究」昭和三十一年九月 山川出版社刊
4 河内西琳寺の金銅阿弥陀如来坐像の光背銘の原文を荻野三七彦氏の判読されたものは次の通りである。

蓋聞法身無相非以色求本姓舜寥非以生滅得
但四生殊菓六道各同所以法藏比丘卅八願

輩往生是以

書大阿斯高君子支弥高（首修行仏法草創西林寺）

復以子梅檀高首士師長兄高（建羊古首韓会古）

敢奉塔寺寶元五年己未正月（二種智）識敬造旃陀

仏像并二菩薩願此功德現世親族福延万世七世

父母隨意住含靈之類同斯福力

5 井上光貞「王仁の後裔氏族と仏教」（史学雑誌五四ノ九）昭和十八年九月

6 鳥根・鰐淵寺観音菩薩像の台座銘の原文は次の通りである。
壬辰年五月出雲国若倭部

臣徳太里為父母作奉菩薩

7 法隆寺の「甲午年銘観音菩薩造像記銅板」の銘の原文は次の通りである。

（表面銘銘）

甲午年三月十八日鰐大寺徳聡法師片岡王寺令弁法師
飛鳥寺弁聡法師三僧所生父母報恩敬奉観世音菩薩
像依此小善根令得无生法忍乃至六道四生衆生俱成正覺

族大原博士百済在王此土王姓

8 平子鐸嶺「法隆寺藏德驗令弁升聡三僧造觀世音菩薩像記」学題一ノ二二 明治四〇年

9 山田孝雄・香取秀真編「続古京遺文」宝文館 明治四十五年

10 法隆寺戊子年銘釈迦如来及び脇侍像の光背銘の原文は次の通りである。

戊子年十二月十五日朝風文

將其零済師慧燈為嗽加大臣

誓願敬造釈迦像以此願力

七世四恩六道四生俱成正覺

11 福山敏男「法隆寺の金石文に関する二、三の問題」夢殿一三三 昭和十年

12 東京国立博物館の辛亥年銘觀音菩薩像の銘の原文は次の通りである。

辛亥年七月十日記筭評君名因古臣辛丑日崩去辰時故兒在布奈(以上正面)

太利古臣又伯在麗古臣二人志願(以上左側面)

なお「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」昭和五十一年九月奈良国立文化財研究所編には、一行目因を左かとしている。

13 観心寺阿弥陀如来像の光背銘の原文は次の通りである。

戊午年十二月為命過治

伊之沙古而其妻名汗麻

尾古敬造弥陀仏像以

此功德願 過往其夫

及以七世父母生々世々恒生

淨土乃至法界衆生

悉同此願

なお根津美術館の光背には、一行目の最後に「名」を刻む、奈良国立文化財研究所編「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」参照

14 東京国立博物館の丙寅年銘半跏思惟像の銘の原文は次の通りである。

歲次丙寅年正月生十八日記高屋(以上正面)

大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南无頂礼作奏也(以上右側面)

15 関晃「大化前後の大夫について」「山梨大学文学部研究報告」第一〇号 昭和三十四年十二月

16 藪田嘉一郎「丙寅年高屋大夫造像記考釈」「美術研究」四八号 昭和二十三年六月一日

飛鳥・白鳳小金銅仏の発願者、制作者 上

17 「造像銘記」では本像を如意輪観音としている。また天平十九年の「大安寺資財帳」

には、金湏太子像七軀の記載がみえ、普通太子像といえは、灌仏像すなわち誕生仏を指

すことが多いが、同帳には、その前に灌仏像一具と明記しているから、この金湏太子像

七軀は、灌仏像でないことはたしかである。しかも七軀もある点は、いつそうその感が

強い。また中国では、こうした半跏思惟像は、悉多太子として作られる例が多いところ

から、あるいはわが国でも、悉多太子として制作された可能性は強い。

18 大分長谷寺の観音菩薩像の台座銘の原文は次の通りである。

壬歳次撰提格林鐘拾伍日周防凡直百背之女函背兒為命過依誓願觀世音菩薩作

19 野中寺弥勒像の台座銘の原文は次の通りである。

丙寅年四月大旧八日癸卯開記栢寺智識之等詣中宮天皇大御身勞坐之時誓願之奉弥

勒御像也友等人数一百十八是依六道四生人等此教可相之也

20 田中重久「聖德太子御聖蹟の研究」昭和十九年十月 全国書房刊

21 福山敏男「野中寺弥勒像銘文中の栢寺」「史迹と美術」二〇八号 昭和二十五年十二月

22 坂本太郎「古代金石文二題」昭和四十七年六月刊「古典と歴史」所収

23 長谷寺千仏多宝仏塔銅板の原文は次の通りである。

惟夫靈應

立称已乖

真身然大聖

不図形表利福

日夕畢功慈氏

仏説若人起寧堵波其量下如

阿摩洛菓以仏駄都如芥子許

安置其中樹以表利量如大針

上安相輪如小瓊葉或造仏像

下如續麦此福無量專以奉為

天皇陛下敬造千仏多宝仏塔

上厝舍利仲擬全身下儀並坐

諸仏方位菩薩罔繞声聞獨覺

翼聖金剛師子振威伏惟聖帝

超金輪同逸多真俗變流化度

无央庶冀永保聖蹟欲令不朽

天地等固法界无窮莫若崇拋

靈峯星漢洞照恒秘瑞巖金石

相堅敬銘其辭曰

遙哉上寬至矣大仙理婦絕妙

事通感緣釈天真像降茲豊山

鶯峯宝塔涌此心泉負錫來遊

調琴練行披林晏坐寧枕熟定

乘斯勝善同婦実相沓投賢劫

俱值千聖歲次降婁漆兎上旬

道明率引捌拾許人奉為飛鳥

清御原大宮治天下天皇敬造

24 福山敏男「長谷寺の金銅版千仏多宝仏塔について」考古学雜誌二五ノ三

25 鶴岡静夫「宮中御窟院」昭和五年七月弘文堂刊桜井徳太郎編「日本宗教の複合的構

造」所収

26 先の註16参照

27 天平時代の小金銅仏では、銘のあるものは一体もないが、新薬師寺の塑造十二神将像

は、例外の一つで父母親族のためと記す銘が台座に墨書されている。これについては、

拙稿「新薬師寺の十二神将像について」美術研究二八一号を参照されたい。

図版要項

一 紺紙金銀交書法華経 卷第一見返し(原色刷)

滋賀 延 暦 寺 蔵

紺紙金銀泥 本紙天地二六・八cm

二 a 同

卷第二表紙 同

紺紙金銀泥

b 同

卷第二見返し 同

本紙天地二六・八cm

三 a 同

卷第三見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・九cm

b 同

卷第四見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・九cm

四 a 同

卷第五見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・八cm

b 同

卷第六見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・七cm

五 a 同

卷第七見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・八cm

b 同

卷第八見返し

同

紺紙金銀泥 本紙天地二六・七cm

六 観音菩薩像

島根 鰐 淵 寺 蔵

金銅 全高九四・九cm 像高七九・八cm

七 a 同

側面

b 同

背面

八 菩薩半跏思惟像

山口 日 天 寺 蔵

金銅 全高一九・五cm 像高一七・八cm

九 a 同

側面

b 同

背面